上：マッシュルームサラダ。下：ジャガイモとレバー。

6時をちょっと廻ってバリアコフに着く。まだ早過ぎると思っていたが、常連風のジイサン二人が既に食事中だった。前回は入り口に近すぎる席を選び、結果的に落ち着かない気分だったので、幾分奥まったテーブルを選ぶ。照明の加減か、店内は先日よりも落ち着いた雰囲気だ。

サラダは今までと趣を変え、材料にマッシュルームが表示されているものを、メインもやはり材料からレバー料理にした。後はハウスワインをデカンターで500cc。

マッシュルームサラダはかなり予想外のもので、野菜炒めと呼んだ方が少なくとも日本人には判りやすそうな代物だった。しかし野菜をしっかり食べるという観点からは良好なもので、生野菜に拘らない私向きの一皿だ。味付けも良い。

隣のジイサン達は大皿から取り分けながら楽しそうに食べている。隣の芝生かもしれないが美味そうに見えた。しかし大量に盛られていたから、二人前以上で注文しなければならないようなメニューかもしれない。

メインのレバーは鶏だろうか。癖やきつい匂いもなく、柔らかくて食べやすいものだった。ワインをグラスで追加して無事に総てを平らげる。帰って晩酌が続くのでコーヒーはなし。勘定はデカンタ・ワイン6Lv(330円)、マッシュルームサラダ5.5Lv(302円)、レバー6Lv(330円)、自家製パン2.4Lv(132円)、グラスワイン4Lv(220円)。

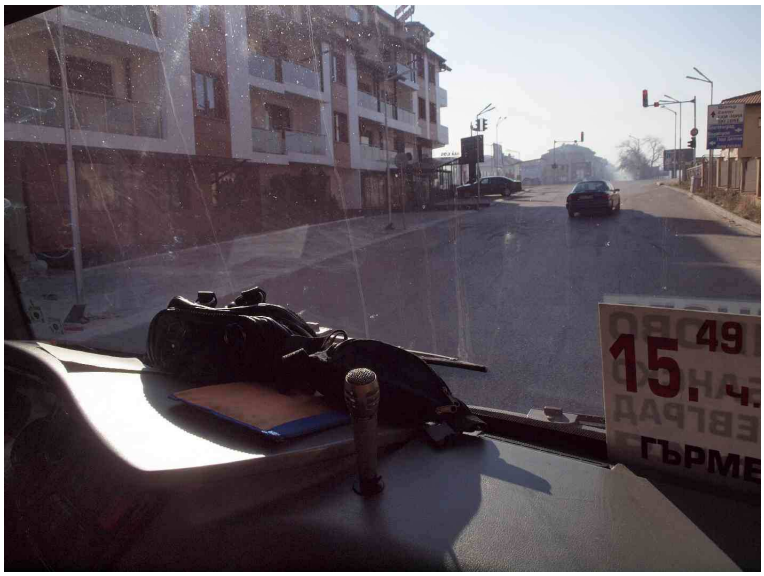
上：宿の鍵は、外部から、食堂部分から宿泊部へ、部屋の三つ一組。しかし実際に使ったのは部屋に出入りするときだけだった。下：朝食。

１５．ソフィア(София)2

ソフィア行きバス

明けて28日も薄曇りの穏やかな朝を迎えた。8時半に朝食のため下へ降りると、朝食堂に5人ほどがテーブルを囲んでコーヒーと煙草で一服している。近所の住民かと思ったら従業員で、客の姿を見ると一斉に散っていった。

年配の、ウェイターというよりはオーナーみたいなオヤジが注文を取りに来た。選択肢としていくつか云われた中で、良く聞き取れなかったトラディショナル？？を頼む。しばらくして運ばれてきたのは焼きたての素朴な白パンと、ブラックベリージャム、チーズだった。



視界の良い車掌席からの眺め。

パンの種類がトラディショナルなのか、このような朝食スタイルを伝統的と云うのか良く判らない。訊いておけば良かったが、トラディショナルに続いた言葉が聞き取れなかっただけに、何となく質問しにくかった。

一昨日のバスステーション下見で、ソフィア行きは11時20分発のバスに決めていたので、10時半まで部屋で寛いだ時を過ごしチェックアウトした。三泊の料金はトータルで税込み111Lv(6,096円)だった。カードで支払う。朝食のみならず(1回しか利用しなかったが)夕食込みでこの料金は、設備などが比較的良かったことを合わせると、今回の旅で一番のコストパフォーマンスだったといえる。

バスステーションに着いたのは11時ちょっと前だったが、既にソフィア行きバスは停車していた。一見して満員だと判る。この便はバンスコの南東40キロのオニャノボ発9時で、少なくとも四つの停留所を経由してからバンスコに来る。此処で待っていた人は乗車済みのようだ。ともかく床下収納庫にスーツケースなどを収めていた制服姿の男に声をかけた。

「ソフィアか？」と訊くのでイエスと答えると、私のカバンを受け取りながら乗車口の方を指す。何とか乗れるらしい。ステップを登って車内に入ると、運転席には珍しく女性運転手が坐って切符を売っている。ソフィアまでは約160キロで料金は15Lv(824円)だった。ソフィアまでは3時間ほどかかるが、立って行く羽目になるのだろうか。

しばらくすると荷物を収納庫に整理していたオヤジが乗り込んで、彼女と交替する。運転手は彼で女性は車掌だった。さらに二人ほど乗車してくる。いよいよ発車する段になると、彼女が(多分)「空いている車掌席に坐れ。」とブルガリア語で云う。他にも大勢立っているし、彼女に至っては乗車口ステップの上なので、申し訳ないと思いつつも、視界良好の席が占められたことはしてやったりの気分にもなる。

しかしこれはとんだ糠喜びだった。10分ほど走り、見覚えのあるラズログ駅前に停まると大勢がざわざわと降車体勢になり車掌は開いたドアからいち早く車外へ。車掌席は通路をふさぐ形で坐るので、慌てて立ち上がり座席を畳んでから車外へ飛び出す。成り行きがさっぱり読めないので、ドア付近で人通りを妨げない位置に立って運転手の動きに注目した。おおむね半数の客が降車すると、運転手は手招きして一番奥の方へ坐れと身振りで示す。

ラズログからも多数の乗客があり、結局通路にまで立錐の余地がないほど詰め込む。女性車掌はいつの間にか最後尾まで来て、後尾乗降口のステップに腰掛けていた。器量よしだが気取ったところがなく好感が持てる人だ。

ラズログからも満員状態が続く。

ラズログを11時35分に発車し、1時間弱で見覚えのある街に接近した。バンスコへ行くときバスを乗り換えたブラゴエヴグラドだ。間もなくバスステーションに停車したが、3日前に利用したものとは異なり、規模は大きい。グーグルの地図で調べると、この二つは1キロ以上離れていた。先日利用したとき、至近距離で乗り換えられたのは幸運だったのだろうか。

ブラゴエヴグラド間近の車窓風景。

ステーションで7割方が下車する。ラズログとは異なり、乗車する人はほとんどなかったので、打って変わった閑散とした車内になる。それまで意識していなかったが、通路にまで溢れる乗客から受ける圧力は高かったようで、ブラゴエヴグラドからソフィアまでの1時間半は寛いだドライブを楽しむことができた。

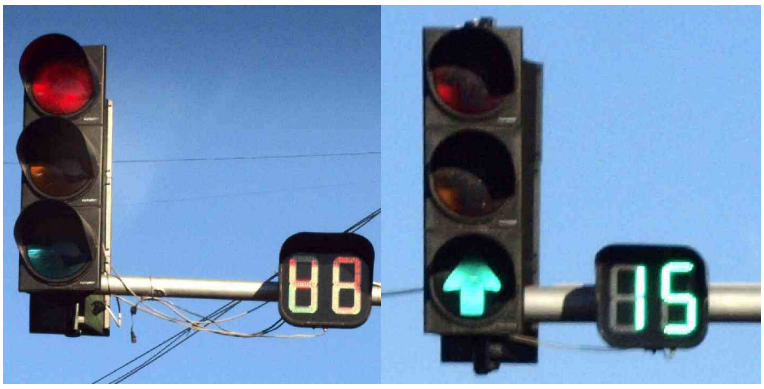
左：ブラゴエヴグラドのバスステーション。バンスコから乗ってきたバスはいすゞ製だった。
右：バスに貼り付けられた「品質と快適さ」のステッカー。フランス語か？実際にはいささか古ぼけた車内だった。

2時半に予定通り、オフチャ・クペル・バスステーションに到着した。ここからホテル・アリスまでの移動はトラムの利用などが考えられるものの、対費用効果はタクシーが一番だ。しかしソフィアで拾ったタクシーでは二回ともぼられているので気が進まなかったが、結局利便性に負け、バスステーション近辺で客待ちしている中で、比較的善良そうに見えるジイサンの車を選んだ。

ブラゴエヴグラドから先のガラガラ車内。

ところがこのジイサンがとんだ喰わせ者で、ソフィア中心部に入ったところで、細い路地をあたかもその近くにホテル・アリスがあるようにうろちょろ始めた。いかに方向音痴の私でも、以前歩き廻ったり、数日前にタクシーで通過した記憶があり、そして当該地域から2キロも離れたところを引っ張り回されればおかしいことに気付く。たまりかねてそれを口にすると、そこから先はほぼ最短距離でホテル・アリスに到着した。

最短距離ならば6.5キロぐらいが10.4キロになり、料金は9.25Lv(508円)。しかしどことなく愛嬌



ソフィア市内の信号。赤の待ち時間と青の通行可能時間が表示される。

のあるジイサンなので、鷹揚？にチップ込みで10Lv支払う。

左：ソフィアにはプロのガラス拭きがいて、道具一式を持ち歩き、ショーウィンドウなどを磨いている。右：前脚部分には袖の付いたドッグウエアを着て、マスコットぬいぐるみまで着けた犬。興味を惹かれスナップ撮影しておいたところ、後刻再会した。

ホテル・アリスの禁煙ルーム

フロントの女性はこちらの顔を覚えていて、すんなりチェックインできる。禁煙階を希望して、今回の部屋は3階だった。

部屋に荷物を運び込み、一息つくと既に3時を廻っていた。昼飯抜きなので、すぐ食事に出かける。目指したのは前回二度ほど利用したマナスティリスカだ。ところが同じ道を三度辿るのもつまらないと、ちょっとばかり違うルートを選んだら、早速迷ってしまった。度し難い方向音痴だが、年々その度合いが強まっているような気もする。これは呆けだろうか。

半時間ほど無駄にして、ようやくマナスティリスカに辿り着いた。4時という食事には中途半端な時刻だから、店内は閑散として、先客は女性が一人いるだけだった。

ウェイターがお品書きをテーブルに置いて行く。分厚いリストには、（多分）各地方の郷土料理まで網羅して、判る人ならば選んだり客に説明する楽しみがあるのだろう。しかし老眼かつ疲れ目で、かててくわえて未だにブルガリア料理の基本を理解していないものにとっては苦痛だった。しかしウェイターのお奨めにしてしまうのも、一月旅をした後だと癪だ。結局英文で書かれた若干の説明をもとに、自家製パンと豚肉のシチュー、赤ワイン1本にした。

先客はキャリアウーマン風の美人で、書類をいじったり携帯を掛けながら食事をしていた。常連らしく、店のスタッフとも時々気軽に言葉を交わしている。そのうち店のBGMがポップスになったら、ナイフと手でテーブルを叩いて拍子を取っていたいた。多分歌詞もロずさんでいたのだろう。彼女にとっては気の置けない店で、それも一番閑散とした時間帯故に、つい放縦な振る舞いとなってしまったかと思うが、面白い人だ。

ワインと自家製パンが運ばれてきた。ふかふかの焼きたてパンはそれだけでも美味かったが、一緒に供されたマッシュポテトやスパイス、ロシア・オリヴィエサラダ風などともに食べるとワインが進んだ。数杯グラスを干したところで、メインの豚肉シチューが運ばれてきた。

パンと一緒に出てきたマッシュポテトやスパイス、ロシア・オリヴィエサラダ風など。

上：豚肉シチュー。下：庭のテーブルにもクロスがセットしてあった。気温は15℃以下と思われるが、それでも外で食事をする人がいるのだろうか。

シチューなる名称でまず湧き上がるイメージは、ホワイトシチューかブラウンシチューなのだけれど、目の前に置かれたものはスープの色合いも淡泊で、味わいも脂やゼラチン分の少ないあっさりしたものだった。それ以上には印象が残っていないので、普通に美味かったのだと思う。

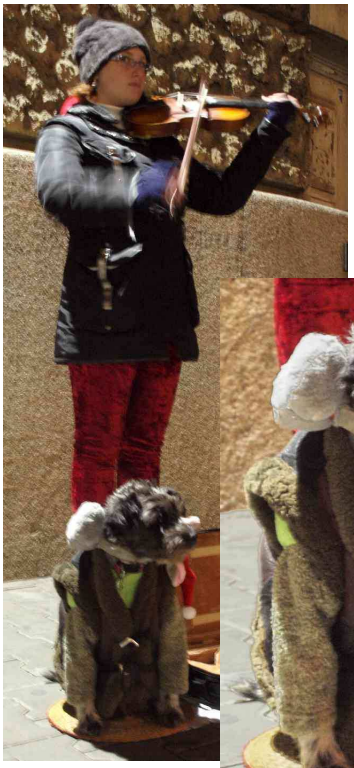
閑散とした店内でのんびり食事をしたせいか、ミルクコーヒーで終わったのは店に入ってから1時間以上たっていた。

勘定はパン0.65Lv(36円)、ワイン29.9Lv(1,642円)、シチュー16.8Lv(923円)、コーヒー2.8Lv(154円)、ミルク1.2Lv(66円)のしめて51.35Lv(2,820円)だった。ワイン一壜を開けてこの値段は、日本ならば格安だけれど、「随分高いな。」と思うようになっていた。

外へ出ると辺りは既に暮れ、中天をわずかな残照が白く染めている。宿へ向かう道すがら沿道の屋台店などを覗きながら漫ろ歩いて行くと、何となく縁日の夜店巡りをしているようで気分が浮き立つ。ヴァイオリンの調べが流れてきたので、そちらを見ると、先ほど見かけたワンコを前に、若い女性が街頭演奏をしていた。犬の過剰装飾は客寄せ効果を期待してのものらしい。ワンコは殊勝なといっても良さそうな様子で坐っている。ヴァイオリン・ケースにコインを5Lv(275円)くらい投げ込み、許可を貰ってから数枚撮影した。

宿へ帰ってしばらく飲み直し、この晩も早寝をした。ところが11時ころになって、隣室からの人声で目が覚めてしまった。しばらく聞いたところからすると男が一人で叫んでいる。時刻からして許し難い大声だ。11時40分になっても静かにならないので覚悟を決めた。

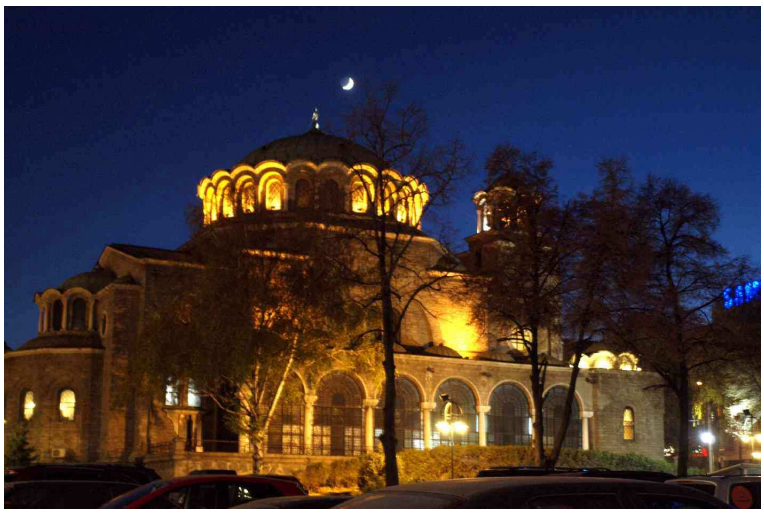
衣服を纏い、隣室のドアをきつめにノックする。反応がありしばらくしてドアが開き、オヤジが立っている。動きが鈍く目が虚ろなのは泥酔しているためだろう。頭をツルツルに剃り上げ、その他全体的な雰囲気は海坊主とはかくやと思わせるようなものだった。通じるとも思わなかったが、英語で、「静かにしてくれ。」と云い、口の前に人差指を立てて身振りを交えた。



街頭演奏とその前に坐るワンコ。

そのまま部屋へ戻り様子を窺うと、幸いそれ以後はひっそり静まりかえっている。禁煙階にもかかわらず部屋にはタバコの煙が充満していたが、そんな状態で酒を飲みながら何事か喚いていたのだろうか。騒音に対する腹立ちが収まり冷静になると、怒鳴り込んだのは軽率であったかの反省も湧き上がった。

2年前クロアチアのザグレブで、向かいの部屋が深夜までうるさかったことがある。このときはフロントに苦情を云ったのだが、そ



聖ネデリャ教会。5時41分。

こにいたマネージャーは、怯えたように、「替わりの部屋を提供するので、申し訳ないがそちらへ移って下さい。」と返答する。真相は判らないものの、騒いでいたのはヤクザの類だったのか。そんなことを思い出すと、直接対決するのは避けた方が安全だったと思う。

ボヤナ教会のある庭園入り口ゲート。

ボヤナ教会

翌朝目を覚まし、室温がこれまでになく暖かいので温度計を見ると24℃もある。暖房能力不足を感じながらの旅だったが、バンスコ辺りから風向きが変わったようだ。しかし同じ宿なのに一ヶ月前に肌寒く感じたのは、最上階の隣室もない環境ゆえだったのか。

習慣で早めに朝食を済ませたものの、この日行こうとしているところはボヤナ教会だけだったので、部屋で怠惰な時を過ごし10時近くなって出かけた。まずフロントで部屋替え交渉をする。11時40分まで隣室が騒がしく、大変迷惑したことを伝え、できれば以前利用した6階の部屋を希望する。隣室がある部屋では、今晩の宿泊者が静かだという保証はない。閑散期のせいかすんなり要求が通り、6階の部屋が空いたら荷物を移動してくれることになった。次にボヤナ教会までタクシーを頼む。自力で拾ったタクシーは3回試みて全部ぼられていたから。

宿の玄関前でひんやりした外気を心地良いと感じながら待つこと5分ほどで、60代の実直そうなオヤジの運転するタクシーが到着した。予め目的地は告げられていたらしく、「ボヤナ」の一言に頷いて車を発進させる。

ソフィア中心部は朝の交通混雑がまだ残っているようだったが、それを通過すると快調に南西へ進み、20分ちょっとで公園を思わせるゲートの前に停車した。メーターには8.58と表示されていたのでチップを含め11Lv(604円)支払う。チップを5%から10%とと考えれば、もっと少なくて良いのだが、ぼられていないと思うとその分を報いてやりたくなる。それにともかく絶対額が安い。

教会は見えないが、ゲートの脇に三カ国語で書かれた説明板があり、英語版を読むと、「ユネスコ世界遺産云々．．．．」などとあり、この庭園内にあることは間違いない。

中は閑散とし、ジイサンが一人落ち葉掃除をしていた。石畳を辿ると小屋が二つあり、此処が管理センターみたいなものらしい。入場券を購入した。

ボヤナ教会正面。

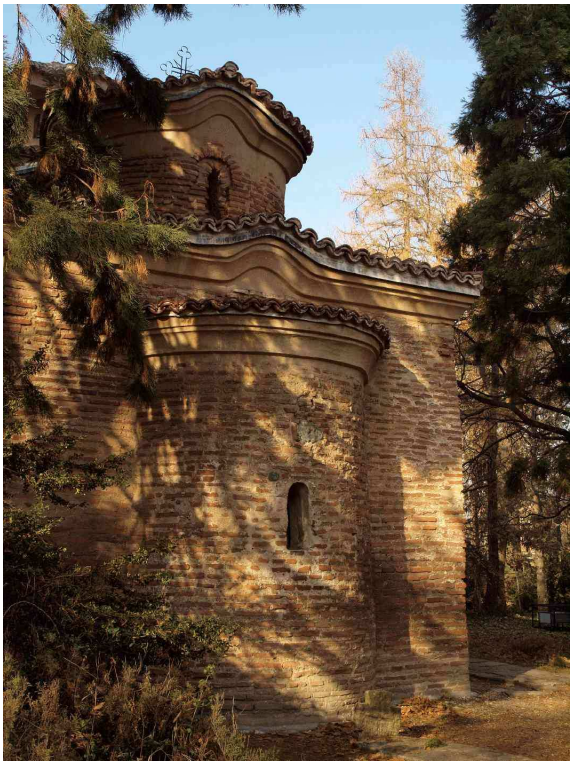
聖ニコライ

ボヤナ教会の当初名称は聖ニコライ教会で、堂宇内の壁画も彼に関する逸話が多く描かれている。この聖人は3世紀にパタラ（地中海沿岸で当時はローマ属州の街。現在のトルコ南部に位置し遺跡が残っている）に生まれ、ミラで大主教をつとめた。日本ではあまり馴染みがないと思うが、キリスト教世界では人気があるらしく、聖人の概念を持つ全ての教派で聖人とされている。また日本でも、「サンタクロースの源は彼」と云えば親しみが湧くのかもしれない。

ともかく彼の生涯は聖人には珍しく修羅場の少ないものだったらしい。ディオクレティアヌス帝とガレリウス帝がキリスト教を迫害したとき幽閉されたことと、第1回ニカイア公会議で激高してアリウスを殴ったことにより破門されたことぐらいか。しかしどちらも神のお告げなどにより円満に解決している。

その一方で数多くの奇跡を行ったと逸話は伝えている。エルサレムを巡礼する為に海路を辿ったときには、暴風に遭遇したがこれを鎮め、船から落ちて死んだ水夫を甦らせた。このことから海運の守護聖人となっている。また冤罪の人を救ったことも度々あり、このことから西方教会では「無実の罪に苦しむ人」の守護聖人とされている。また悪逆非道な肉屋が子供を誘拐殺人して、商品にした7年塩漬けの子供7人を復活させたという伝承から子供の守護聖人ともされている。

死後はその遺体から芳膏が湧き出て、多くの人々の病を癒した。このような奇跡から彼を記念する聖堂が各地に建立された。



後陣の外側。教会で一番古く建造された部分。

教会だけの入場料は10Lvだが、同じく10Lvの国立歴史博物館との共通券が12Lv(659円)と大幅お買い得になっている。博物館は好みでないものの、2Lvならば無駄にしても良かろうと、共通券にした。

小屋の中にいたオバサンの一人が先に立って案内してくれる。カザンラクのトラキア人墳墓と異なり、此処はオリジナルを公開しているだけに、管理は厳しい。教会建物へ一度に立入できるのは8名までで、中にとどまれるのは10分以内とされている。この条件だと、繁忙期に訪れれば長時間待たされることになりそうだが、今は一人でのんびり見ることができるのが有り難い。10分という制限時間も、私のような節穴眼力鑑賞者にしてみれば充分だ。

入ってすぐの区画は二回目（最後）の増築で19世紀半ばに築造されたもので、外郭は一番大きいもののガランとしていて見るべきものもない。13世紀に築造された後陣への通路にもなっている拝廊と一番古い区画である東翼の壁がほとんどフレスコ画で埋め尽くされている。

テーマとなっているのはほとんどが聖書の場面と聖ニコライの逸話だが、13世紀半ばに増築を行ったカロヤン夫妻と当時の皇帝夫妻の肖像も要所を占めている。

ブルガリア皇帝コンスタンティン1世。

作画された時代は13世紀なのに、人（神）格を反映するように描写された表情などはルネサンスの先駆、あるいは多大な影響を与えたのではないかなど、高く評価されている。世界遺産に登録されたのも、これらのフレスコ画ゆえだろう。

カロヤンや皇帝の肖像も素晴らしいと思うが、それよりも聖ニコライ関連が好みにあった。10分間と短い鑑賞だったが、堪能した気分で教会を出る。ちなみに教会内は撮影禁止なので、掲載した画像はインターネットから採取したものだ。

エルサレム巡礼時、嵐に遭遇した聖ニコライと船乗り。

まだ時刻は10時半をちょっと廻ったくらいで、共通券もあることだし、国立歴史博物館を覗いてみることにした。券を買ったとき、オバサンが教会からどう行くか教えてくれた。「歩いてもいけるけど、判りにくいからバスに乗った方が．．．．」とのことで、教会界隈を循環するバスがあるから、それに乗って運転手に国立歴史博物館と云えば良いらしい。

聞いたときは安易に考えていたが、いざ踏み出してみると意外に難儀した。まずバス停標識などが見当たらない。しばらくうろうろして、オバサンが同じところに佇んでいるからバスを待っているのかと予測し、彼女に話しかけてみた。何とか質問の意味は通じたようだが、しばらく考えていたオバサンは、何も云わずに20メートルほど離れたところにあるカフェへ歩いて行き、そこにいた連中に何事か話す。5、6人がゾロゾロ出てきて私に話しかけるのだが、ブルガリア語なのでさっぱり判らない。

そのうち向こうも諦めたのか、仲間内で世間話など始める。こちらも仕方ないので少し離れたところでともかくバスの出現を待った。5分ほどしてバスが坂を登ってくると、彼等が一斉に動き出した。こちらへ向かって呼びかけたり、手を振って招いたりする。バスを見逃さないよう、みんなで張り番をしてくれていたのだ。ともかく小走りでそちらへ行き、できるだけ心を込めてメルシーという。ブルガリア人が親切だとは感じていたが、これほどとは驚いた。親切さに加え気持ちの余裕かもしれないが、少なくとも日本の首都圏近郊ではこのようなことはあり得ないと思う。

なんとかバスに乗ることができて一息ついた。幸い、「国立歴史博物館」は運転手に通じたものの、今度は車内で切符を買うことができない。彼は英語を話さないので良く判らないが、システム的に車内では売らないことになっているのかもしれない。

10分ほど紆余曲折を繰り返し、「歩いて辿り着くことは不可能だったな。」など考えていると、運転手が降りろと教えてくれる。礼を述べつつ下車し、結局無賃乗車になってしまった。

バスが走り去るのを見送り、おもむろに辺りを見回したが、道の片側は民家、反対側は塀が続くばかりで博物館らしいものへの入り口はない。仕方ないのでこの塀に沿って歩くこと10分ほどで、ようやくそれらしい雰囲気の堂々たるゲートが見えた。ゲートからは幅50メートルほどのアプローチが150メートルぐらい真っ直ぐ延び、正面に重々しい箱形の建物がある。

入場料は10Lv(549円)だったが、これは外国人料金で、ブルガリア人であれば2Lvらしい。考え方として外国人（お客さん）優待とは逆の行き方だが、外国人の括りではなく、日本程度の経済力がある国から来訪したならば500円くらいは支払って当然だと思う。

入場料談義はともかく共通券で中へ入った。建物の外観も立派だったが、内部もそれに相応しい重厚さだ。国内総生産が日本に較べて百分の一くらいであることを考えれば、かなり

上：正面ゲートから見る国立歴史博物館。下：階段を降りた半地下が入り口だった。

トラキア人

歴史的教養に乏しいので、以下の記述は眉唾でお読みいただければ幸いです。

トラキア人は文字を持たなかったこともあり謎の多い民族だ。現在のブルガリア南部、ギリシア北部、トルコのヨーロッパ部などに居住し、多くの部族に別れていたが、時として連合し強大な勢力となることもあった。B．C．3にマケドニアに征服されてから、次第に他民族の侵入や支配により混合消滅して行き、末裔として現在のブルガリア人やルーマニア人となっている。

歴史家ヘロドトスによるとトラキア人は、「子供が生まれると、これから身に起こる不幸を数え上げ、悲しみ、涙する。そしてその死に際しては、永遠の幸せを得たとして喜び、祝い、酒を酌み交わす。」と伝えている。このように死は輝かしい来世のスタートを意味したから、一夫多妻制のもと複数いた妻達は殉死することを競い合ったと云うし、戦士達がきわめて勇敢だったこともうなずける。

1972年に黒海沿岸のヴァルナ近郊で工事中に偶然発見された遺跡からは多数の金、銅製品が発掘され、金製品の総重量は6キロ以上に達した。年代測定の結果、エジプトやメソポタミアより古く、世界最古とする説もある。

また近年の発掘により、B．C．4、5ころの金製品も多数見付かっている。古代ペルシャやエジプトなどに較べて、それほど強大であったことのないトラキアで大量のそして質的に非常に高度な金製品が生産されたのはなぜなのか？

この博物館運営が重要視されていると思われる。ブルガリアでは民族復興期のモニュメントなどと共に、「歴史」は国民の求心力を高めるために必要なのかもしれない。

館内の展示は先史時代、古代トラキア、中世の第一次ブルガリア王国、第二次ブルガリア王国、オスマン帝国支配時、第三次ブルガリア王国以降に別れていて、一応順路も定められていたが、どこかのTV局が取材中のため入れない部分があった。

スフインクスをかたどった黄金のリュトン（B.C.4前半）。

しかし見物にそれほど重きを置いていなかったので気にしないで一通り眺めて行く。歴史や考古学に興味がないので面白くなかったが、その中で強烈な印象を受けたのがトラキアの黄金細工だ。

古代に金の主産地ではなかったはずだし、それほど強大な帝国でもなかったトラキアの地から、今なお次々に新たな発掘品が出るという。

左のリュトンを見ても、表情の描写が巧みだし、鋳造技術も高いようだ。画像に同時代のドラクマ金貨を比較のために貼り付けてみた。貨幣より遙かに複雑な構造のリュトン鋳造が技術的に困難であろうことは素人の想像に過ぎないが、卓越した技術だと思う。貨幣と異なり、一品生産の手工芸品だから可能だったのだろうか。

ちなみにリュトンを見たとき、当初は角（つの）型の金杯かと思っていた。執筆にあたり調査したところ、儀式などで液体を注ぎ分けるのに使用され、古代の人々はこれを通った酒、ワインなどは神聖な力が宿ると信じていたらしい。この画像では上部から液体を流し入れ、スフィンクスの右手首にほとんど隠れている孔から酒器などに注ぐ。儀式に使用する祭具だから、酒杯などに較べより一層丁寧に作られたのだろうか。

館内は撮影禁止で、それを気に留めていなかったが、この部屋に展示されているものを見て、

その他の黄金発掘品。スフインクス・リュトンに較べると、銀の含有量が少ないのか金色の赤味が強い。

俄然撮影したくなる。先行して見物していたアメリカ人風はコンパクトカメラでスナップを撮っていた。監視員に尋ねると、10Lv(549円)支払えば撮影が許可されるという。なぜかこの許可証は入場券売場とは違うところで発行されるのだが、それを買い求めて再度リュトンなどを見直した。

スフインクス・リュトンの展示されている部屋には、他にも数多くの黄金発掘品が展示されている。いずれもトラキアの遺跡からで、細工の精巧さはともかく、黄金の使用量からするとスフインクス・リュトンを凌駕するようなものが多い。

執筆にあたり慌ててエジプトやギリシャなどの古代黄金製品を調べてみたが、素人目からするとトラキアの迫力は一番に思える。それに古代ギリシャのものはシュリーマンによるトロイ遺跡からのものが有名だが、これは半ばトラキア製品ともいえそうだ。

日本の文明文化とはとことん異なる黄金製品をしばらくの間呆然と見続けた。この部屋を出てしまうと、後は気が抜けたようなものだったが、それでも中世のコインコレクションや、ボヤナ教会壁画のレプリカなどは見ごたえがあった。

イコンの収集や民族衣装の収集にも力を注いでいるようだけれど、これは趣味的に合わないというか、面白いと思えなかった。結局約1時間の見物で博物館を退去する。

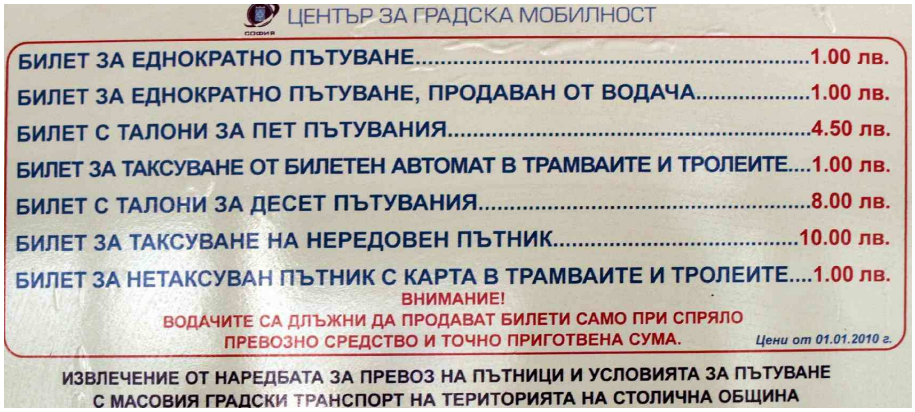
一日乗車券とワインオープナー

国立歴史博物館を出たまではよいが、いかにして戻るかが問題となった。歩くには距離がかなりあるし、それ以上に地図などがないためどちらへ向かうべきか判らない。タクシーを避けたい気持ちは、昨日遭遇した雲助のせいで強くなっている。

英ガイドにより、バスで路線番号63か64に乗れば良いことは判るが、ヴェリコ・タルノヴォのように地図で現在位置が判明していればともかく、路線番号だけで乗車すると正反対の方向へ連れて行かれる恐れがある。

しばらく迷ったが、時刻もまだ1時になっていないし、バスに挑戦してどうしようもなくなった場合はタクシーで逃避することにした。まずバス停を探す。博物館前の大通りに一つあったが、しばらく待っても63、64が来る様子がない。待っていた人に尋ねても、この日は運が悪いのか英語が通じない。それでも数人に聞き直した結果、交差点を渡った向こうの停留所がそれらしいと判る。

もう一つ問題があった。バス乗車券の購入だ。先ほどは気の良さそうな運転手が見逃してくれたが、場合によっては罰金など科せられるかもしれない。しかし最初の停留所も移動した先も、周辺



バス車内にあった掲示。料金表かと思われる。

に乗車券を売ってくれそうな売店やカフェなどは見当たらなかった。

そのうちバスが来てしまったのでともかく乗る。運転手から乗車券を買おうとしたがやはり駄目だった。しかしこのバスには切符売りのオバサンが乗車していた。車掌ではない。彼女は英語といえば、「アイムソーリー」しか喋らないので良く判らないけれど、切符が買えるとしたら彼女からだけで、その場合売ってくれるのは10Lv(549円)一種類らしい。

仕方なくそれを買う。そばに坐っていた母娘が補足説明してくれたところでは、ソフィアのバス、路面電車、地下鉄などに一日乗り放題の乗車券らしい。普通の乗車券だとどれも1Lv(55円)だから、かなり乗りまくらないと元は取れず、それよりも一々購入せずに済む利便性だろうか。いずれにせよこの日はこれ以上バスなどを利用するつもりはなかったが、遅ればせながら先ほどの無賃乗車は解消されたということか。

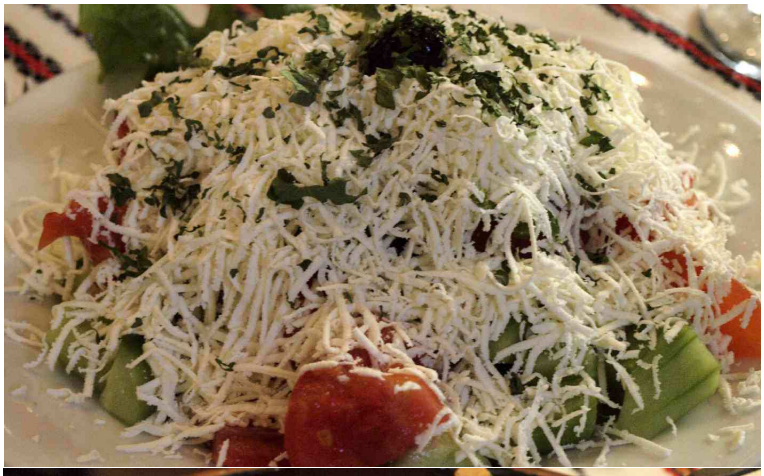
一段落したところで降りる場所として英ガイドからメモホルダーに書き写しておいた pl Ruski Pametnik（レフスキ記念広場）をこの母娘に見せた。幸いすぐに通じて降り時を教えて貰えることになる。

上：1日乗車券の表。原寸大。下：裏面。切符売りのオバサンが日付けを書き込み、一部を破く。a63の意味は不明。

ソフィアのほぼ中心部にある、レフスキ記念広場で下車した。少し北へ行けば聖ネデリャ広場などがある。まだこの界隈は歩いたことがなかったが、聖ネデリャ広場方面へ向かうと繁華な商店街になった。金物屋があったので駄目元でワインオープナーを訊いてみた。店主らしい老婆が、「こんなのは？」と見せてくれたのは、多少イメージに差があったものの、探し求めていたダブルアクションタイプ（P.96上部画像参照）だった。即これを買い求める。値段は12.5Lv(686円)だった。

時刻は既に1時半を廻っていた。ちょっと遅めかもしれないが昼飯にする。マナスティリスカは店の雰囲気が鼻についてきたし料金が高いので止めにする。替わりに英ガイドから探し出したのがプリ・ヤファタで、レフスキ記念広場からだと1キロくらいの裏通りにある。金物屋からは英ガイドの地図を頼りに、あまり迷うこともなく徒歩5分ほどで行くことができた。建物は民族復興期風の二階建てで、小さいながらも庭があり、それを抜けて玄関へ。

上：プリ・ヤファタの外観。下：店内。



上：ショプスカサラダ。下：鶏、豚のサチ。

店内は古い農具が幾つか置かれ、荷馬車の車輪を台にした天井照明などで内装されていたが、全体の印象はマナスティリスカなどより上品だ。先客はなく、店のスタッフもマネージャー風が一人だけ手持ちぶさたそうに佇んでいるのみだった。

渡された英文お品書きから、ワインは赤でマヴルッド・アセノグラウトを1本。これは壜がもたらされてみるとバチコヴォ、コプリフシティツァなどで既に三回飲んでいたものだった。後はショプスカサラダとスパイシー・サチにした。サチの正体はさっぱり判らなかったが、材料は鶏と豚、マッシュルームなどで、決め手となったのは量が300グラムと適当なことだった。これまでほとんどの料理を美味いと思って食べたから、それ以上は悩まなかった。

ショプスカサラダでワインを飲みながらサチを待つ。20分以上かかったのは、作り置きではなく素材からじっくり焼き上げたのだろう。鶏、豚、マッシュルームのそれぞれも美味かったし、材料として書かれていた Soujuk はサラミソーセージを思わせるスパイスの利いた固いタイプの腸詰めだった。これがサチに薬味的に上手く働いている。

結局約1時間以上かけての昼食になったが、その間に他の客が訪れることもなく、静かにそしてごく寛いでサチとワイン、サラダを楽しんだ。最後はいつものようにミルクコーヒーで、勘定はワイン20.9Lv(1,148円)、サラダ5.7Lv(313円)、サチ14.6Lv(802円)、コーヒー1.9Lv(104円)、ミルク1.2Lv(66円)。40Lvで支払い、釣りの5.7Lv(313円)をチップとして残す。

一旦宿へ戻る。既に荷物の移動も済み、部屋は6階に替わっていた。一眠りしてから、3時半を廻ったころ買い物に出かける。目指したのは中央市場セントラル・ハリで、ソーセージの類を自分用に買うつもりだ。

セントラル・ハリに着き、場内を二周ぐらいしたがあまり食指が動くようなものも見当たらず、結局サラミ風ソーセージ二本1.83キロを46.35Lv(2,546円)を買い求めただけだった。

上：セントラル・ハリでサラミ系のソーセージ。下：ソフト・ソーセージ。

16. 帰国

11月30日も穏やかな朝を迎えた。後はタクシーで空港へ向かうだけだから、天候などあまり関係ないけれど、それでも雨風などが強いよりは良い。10時にチェックアウトする。2泊で117Lv(6,426円)だった。フロントで呼んで貰ったタクシーで空港へ向かう。多少朝の渋滞に巻き込まれたが、それも都心部のわずかな範囲で、後は快調に走る。料金はチップ込みで14Lv(769円)支払った。

モスクワへのフライトは12時55分なので、まだチェックインカウンターは別の便を受付中だった。暇潰しに出発ロビーを歩いていると、面白いものが目にとまった。スーツケースその他をストレッチフィルムで包装しているようだ。

しばらく観察していて、大体見当が付いた。熱収縮フィルムを巻き付けてから、傍らにあるシュリンクトンネル(空港手荷物用 X 線検査装置を一回り大きくしたような外観。60～70℃の熱風を吹き付け、フィルムを収縮させる装置)を通しフィルムを荷物に密着させる。トンネルから出てきた荷物は、持ち手の部分などのフィルムを切り取り、取り扱いしやすくする。

面白いので頼んでみた。二人で手際よく作業し、3分かからずに包装を完了する。料金は8Lv(439円)だった。私のカバンは布製で、ファスナーやポケットの蓋など総てがロックなしの無防備なものだから、こんな養生は結構有効だと思う。ただもし日本で同様のサービスを提供した場合、とてもこの値段ではできないと思うのだった。

上:フィルム巻き付け。中:トンネルへ入れる。下:手提げの切り出し。

包装が終わったころ、チェックインカウンターも受付を開始し、このカバンを預けて搭乗手続きもつつがなく完了。

後はじっと我慢の18時間で、定刻の午前11時25分に無事成田へ着陸。そして午後2時には自宅に着いていた。不便、遠いの成田空港だったが、最近になり随分改善されたようだ。

―― ブルガリア紀行　完 ――